

## 《2004年4月例会報告》

【期 日】2004年4月28日(水) 19:00~21:00 (その後茗荷谷駅前にて飲み~23時過ぎ一皆、大急ぎで帰宅=日本 vs チェコ戦TV観戦のため)

【会 場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【参加者(会員)】伊藤彰(大山セパタウロークラブ/筑波大学附属高校97回卒業生) 宇都宮徹彦(フリーランス) 小幡真一郎(JFAレフェリーカレッジ) 加藤貴之((株)クレーマージャパン) 澤井和彦(東京大学) 田中俊也(三日月整形外科) 中塚義実(筑波大学附属高校/東京都サッカー協会フットサル委員) 本田克己((株)クラブハウス) 山中麻耶(YMCAスポーツ専門学校・健康福祉専門学校)

【参加者(未会員)】伊部壘(講談社フットボールニッポン編集部) 塚本正昭(NPO法人文京教育トラスト) 名方幸彦(NPO法人文京教育トラスト) 宮坂雄悟(東京学芸大学)

【テーマ】2004年春のフットサル報告会

【報告者】中塚義実 本田克己

【報告書作成者】中塚義実

注)参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

### 2004年春のフットサル報告会

中塚義実(筑波大学附属高校)、本田克己((株)クラブハウス)

\*\*\*\*\*

### はじめに

2004年度最初の月例会では、フットサルをめぐる最近の話題を3つ取り上げ、意見交換したい。

一つ目は、ハロプロ参戦で話題になった、第4回東京都女子フットサル大会について。女子フットサルの普及と芸能人の関わり、それにともない指導現場で起きたことを中塚が報告する。

二つ目は関西からの報告で、サッカー協会と協力しながら進めてきた民間主催の「ニッポンハムカップ」が、フットサル個人登録制度の導入によってどうなったのか。フットサルの普及と登録制度の話題を本多が報告する。

三つ目はフットサル世界選手権予選の報告で、梶野氏から提供された資料をもとに振り返りたい(梶野氏は出席できず)。

日本とチェコの試合がTVで23:30からあるので、定刻開始・定刻終了、さっさと町に繰り出してTV観戦に備えたい。

### 【1】第4回東京都女子フットサル大会報告—ハロプロ参戦の影響 (中塚義実)

#### 1. 東京都サッカー協会フットサル委員としての活動

1994年にFIFAが、それまで世界各地で独自のルールで行っていたミニサッカーのルールを統一して「FUTSAL」としたのを受けて、日本でも1995年3月、(財)日本サッカー協会(JFA)のフットサル担当者選任要請にともない、同年4月、関東各都県にフットサル担当者を置いた。東京

都では同年 10 月に、各種別委員会より選出された 13 名によりフットサル委員会を設置し、組織化に着手した（サロン 2002HP：2000 年 10 月例会報告より）。

「第 2 種（高校生年代）からの選出」ということで、この委員会の発足当初から関わることになり、今も第 2 種部会長として高校生年代のフットサルを担当している。

フットサルの公式大会は、第 1 種（年齢制限なし）と第 3 種（中学生年代）、第 4 種（小学生年代）で全国大会が行われているが、第 2 種の全国大会は実施されていない（第 1 種に含めて考えられている）。しかし、都内の高校では徐々に「フットサル同好会」や「フットサル部」ができ、民間大会でも高校生の参加が多く、都内の高校生のフットサル人口はかなり多いと言える。そこで（財）東京都サッカー協会（TF A）フットサル委員会では、都内完結の第 2 種大会を 2001 年度より開催している。8 月の「東京都フットサルチャレンジ U-18」と、1～2 月の「東京都ユース（U-18）フットサル大会」である。11 人制サッカーで進めているユースリーグ構想の「オフシーズン」にあたるこれらの時期にフットサルの大会に取り組んでもらおうという意図ではじめられた 2 つの大会は、前者が普及を志向し、後者は競技をより志向した形で行い、徐々に定着してきた（参加チーム数は 10～24 チーム程度）。

筑波大学附属高校サッカー部では、これらの大会に「フットサル部門」だけでなく、普段は 11 人制のサッカーに競技志向で取り組む男子の「アスリート部門」や、「女子部門」も一部参加している（男女の混合チームも認められている）。パフォーマンスは低いが、年 2 回の TF A 主催のフットサル大会は、我々のクラブにとって大きなイベントとなっている。

しかし、女性の参加を認めているとはいえ、女子部門にとっての第 2 種大会は、あくまでも男子の大会である。女子部門が最大の目標としているのは、毎年 2～3 月に行われる「東京都女子フットサル大会」である。

## 2. 第 4 回東京都女子フットサル大会

女子フットサルの普及と強化を目的として 2000 年度から始められたこの大会も、都内完結の大会である。第 1 回大会は筑波大学附属高校の体育館で開催された。毎回 12 チーム程度が参加し、小規模ではあるが、東京都の女子フットサルにとっては 9 月のティファールカップ（2004 年度より全国大会開催）とともに重要な大会である。

本校サッカー部に女子部門ができたのもちょうど 2000 年度のことであり、同時期に誕生したこの大会を、生徒たちは大きな目標にしている。

本年度の大会は、当初、3 月初旬の土日で 1 次ラウンド（グループリーグ）、3 月 27 日に 2 次ラウンド（決勝トーナメント）という日程で準備が進められていた。3 月初旬であれば学年末考査と日程が重なり「困ったなあ」と生徒と話していたところ、TF A の野口氏から連絡があり、大会形式の見直しがあるかもしれないという。もしそうなったら本校としてはありがたい。

ハロプロ参加申込みを機に申込チーム数が飛躍的に増加したため、出場チーム枠を拡大し、当初 16 チーム出場のところを 24 チームで実施することになり、大会形式が変更された。会場は、800 人収容のスタンドがある府中市立総合体育館となったが、利用時間の制約上、1 次ラウンドにおいても 2 日間に渡り開催するよう変更された。こうして本校女子部門も、学年末考査を気にすることなく出場できたのである。

大会形式の見直しだけでなく、ハロプロ参戦によって運営上の配慮がいろいろ為された。当日の混乱を避けるための「整理券の配布」は、同大会ではこれまで考えられなかった。

- 1) 一般観戦希望者にはあらかじめ整理券を配布。上限 400 人。応募多数の場合は抽選
- 2) 参加チームには、観戦用に 20 枚の整理券を配布
- 3) 3 月初旬のグループリーグで敗退したチームにも 5 枚ずつ配布

一般観戦用の整理券に申込みが殺到したり、ネットオークションで整理券が売買されたりと、様々な事態がこれに付随して発生したが、主催者としての TF A は誠意を尽くして開催にこぎ着けた。

### 3. 筑波大学附属高校の対応

ハロプロ参戦にともない、参加チームにも様々な影響があった。グループリーグで対戦することになった本校女子部門にも取材申請が来た。大会を盛り上げるねらいとともに、女子フットサル（サッカー）に取り組んでいるチームを紹介してもらうのはフットサルの普及、女子サッカーの普及にとって良いのではないかとも思ったが、日程の都合を含めた学校側の判断もあり、取材はお断りした。

さらに、プロダクションから「同意書」が来て、チームとしての対応を迫られるようになった。

この同意書は、株式会社アップフロントエージェンシーが、フットサルチーム「Gatas Brilhantes H.P.」が参加する「第4回東京都女子フットサル大会」の様態を撮影することに関し、その写真並びに映像に係る著作権及びその利用方法について、株式会社アップフロントエージェンシーに同意を頂くものです。

このような文言で始まる同意書は、芸能界をはじめとする「契約社会」では当たり前のことだろうが、一般高校生と保護者（及び教員）にとっては恐ろしいような言葉が並んでいる。「将来的に肖像権、その他一切の権利の主張、異議、対価の要求を行なわない」「万一解決に至らなかった場合においては東京地方裁判所を管轄裁判所とし、日本国憲法により解決される」…。

こうした事態に対して、女子部員には「通常の競技会である」ことと「しかし例年とは異なる状況である」ことを話し、まずは生徒から保護者に話をさせ、感触を聞いた。「そんな大会には参加させられない」という声も聞こえてきた。そこで別紙（添付ファイル参照）のような文書を作り、保護者に理解を求めた。通常、保護者宛の文書は、もう一人の顧問と連名で出すようにしているが、もう一人の顧問からは「自分はこの趣旨には賛同できないので名前を外してほしい」と言われた。学校主催の公開授業ですら、ビデオの持ち込みや写真撮影はご遠慮いただくようなご時世である。学校の教員も、こうした問題に対して相当敏感（過敏?）になっていることがわかる。私も教員だが…。

部員が目標にしている大会だからということもあって、大会への参加は全ての親が同意してくれた。が、同意書にはサインしないでほしいと回答したところが4件あった。「よくわからないので不安。だから同意できない」のが大半であろうが、プライバシーの保護、あるいは安全面、例えば狂信的なファンが相手チームである本校の生徒に危害を加えることもあるのではないかと心配を述べる親があった。心配し出すときりがないが、高校生の親としてはわからないでもない。現に女子部のHPには妙な書き込みがあったとも聞く。「同意書にはサインしない」という結論に達した。

それでも互いに理解しないままの大会参加は望ましくないと、プロダクションの方に来校していただき、部員と保護者を対象に説明会を開くことにした。急なことだったので参加できた親は1名だけだったが、部員は全員参加し、ハロプロ参戦の経緯と同意書の意図について、プロダクションの方に説明していただいた。誤解はだいぶ解けたようであり、ハロプロも競技会に参加する姿勢であることが理解されたようである。それでもまだいろいろ言う部員もいたが、競技に専念せよと指導した。

### 4. 大会とその後の反応

当日の様子は、4月5日付でサロンのメーリングリストに投稿した文書（一部修正）で説明に代えたい。

#### ■第4回東京都女子フットサル大会：ハロプロに完勝！筑波大附属

「一体どうなることやら…」のタイトルで本MLに投稿したハロプロとの対戦から1週間以上過ぎました。結果はテレビでもネットでも報道されたとおり、10-0の圧勝です。小金井SCもハロプロに9-0と圧勝。我がチームの2戦目は小金井との直接対決で、引き分けでも決勝トーナメントに進出できる有利な状況でしたが、力の差が出て1-5と完敗。これが3月27日のことでした。

当日は、400人のハロプロファンにスタンドの半分を囲まれた中でのゲームでした。取材陣も、スポーツ・芸能と大勢やって来て、「こんな経験、日本代表（女子）になってもないかしらんぞ」とい

うような環境でした。

この雰囲気プレッシャーに感じてしまうとえらいことになると思います、「一体どうなることやら…」だったのですが、「あいさつ作戦」(会った人とにかく大声であいさつして自分のペースに引きずり込む作戦)が功を奏したのか、彼女たちは全く臆することなく、今まで見たことがないようなパフォーマンスで最初からハロプロを圧倒。開始 30 秒の先制ゴールにはじまり、前記の結果となったのです。4 年前に女子チームが誕生して以来、初めての公式戦の勝利でした。

私は普段、男子アスリート部門(11人制サッカーに取り組む部門)を見ているので、女子の活動にはあまり関与できていません(監督はOBの方にやってもらっています)。それでもたまに見るのですが、あんな生き生きしたゲームは初めてでした。

「アウェイゲーム」を覚悟していましたが、スタンドの残り半分は出場チームの関係者(各チーム 20 名分)で我々の応援をしてくれたし、ハロプロファンも、彼女たちが「フットサルをする様子」をじっくり見ていたようで、「芸能人」というよりも「フットサルプレイヤー」を応援する姿勢だったように思います。スタンドがそのような雰囲気だった上に、ピッチ上は本格的なフットサルの競技会。週 3~4 回練習しているとはいえ、いつも人工芝であり、体育館でやったことがないというのも、ハロプロ側には気の毒だったかもしれません。

そんなわけで、アウェイを感じ、プレッシャーを感じていたのはむしろハロプロの側だったように思いました。

大会前は、芸能人と対戦することによるいらぬ心配(一般高校生のメディア露出の可能性や、おかしなファンからのいやがらせの可能性など)があり、部員・保護者とプロダクション、サッカー協会の間に立って、いろいろ気を遣うことが多かったのですが、いずれにしても貴重な体験でした。

ハロプロには、これからも続けていってほしいと思います。

\*\*\*\*\*

最初ハロプロ参戦の話聞いたときは、「芸能人と一緒にできるからうれしい！」になるかと思っていたら全く逆で、「私達の目標としていた大会に何てことしてくれたのだ。いい加減な気持ちで来たら承知しないわよ」ぐらいな勢いであった。しかし終わってからは、とにかく自分たちが公式戦で初めて 1 勝できた喜びが大きく、相手チームに対してどうこうするのはほとんどなかった。ただ、ハロプロが「ちゃんとやっている」ことは感じただろう。「ちゃんとやっているけど初心者ね」という印象だったと思う。

スタンドの雰囲気も、確かにハロプロファンに半分以上を占拠されてはいたが、出場チーム側の応援席の人たちは我々を応援してくれた。日頃のフットサルの対戦相手が応援してくれたことで、プラスの印象を持っているのではないか

## <ディスカッション 1 >

### 1. 学校の反応

澤井：管理職の反応は？

中塚：副校長に説明したところ理解は示してもらえた。副校長が、一緒にサッカー部の顧問をしていた先生というのかもしれない。教員の中でもこういうことに対する受け止め方に温度差がある。授業の様子がビデオ撮影できないという話は、英語の先生がオーストラリアの授業参観したときに厳しく言われたらしい。カメラもビデオも一切だめと言われたようだ。

澤井：授業風景を撮るときは、言われるまでもなく生徒の後ろから取るような配慮はする。

### 2. ハロプロ参戦の経緯をめぐって

伊部：取材してきた立場から述べたい。彼女たちは事務所からフットサルをやれと言われた。ミュー

ジカルであったりコンサートであったり、そういう練習はしてきたが、フットサルは全く初めて。今までは歌もダンスもすぐにできた子たちだが、フットサルは全くできなくて、自分たちにできないことがあるということが発憤材料になったのか、週4回の練習を仕事の合間にしてきた。本番も遊び感覚はなく、負けたことが悔しくて泣いた子もいた。やってみないと伝わらないこともある。協会や対戦チームの方にはストレスがたまることもあっただろうが、新聞や雑誌にも取り上げられ、フットサルがこれだけ出たことは、フットサル全体に対してはいいことだったのではないか。

これで終わりではなく、あくまでもフットサルを練習して強くなって、プレーヤーとしてもやっていきたいということが一番にある。今年の8月には、フジテレビ主催の民間大会に出場する。今度こそ1勝をとということで昨日から練習を再開した。基本的には練習は取材禁止。秘密練習をやって本大会にチャレンジするとのこと。1~10まで商売したいという感覚ではないと思う。

以前、彼女たちが「単なるキャラクター」としてキダムに関わったことがあった。今回の話は、そういうアプローチではなく、そのスポーツなりイベントなりの実際のプレーヤーになって、みんなにフットサルを知ってほしい、注目してほしいということをしたかった。もちろん芸能事務所なので、どこかの段階でビジネスをする必要もあろうが、この大会において商売目的はなかった。

澤井：なぜフットサルをやるのか。誰かが働きかけたのか。どこかが金を出しているのか

伊部：事務所の間人ではないのでわからないが、この段階まではスポンサーも付いていないし、事務所自身が先行投資として、北澤氏の指導費も含め、事務所負担でやっていると聞いている。

澤井：仕事として終わったらおしまいになってしまうのではないか。

伊部：そういうことがあったとしても、フットサルという大きなくくりの中では、広まるというのはいいことなのではないか。

中塚：説明会で事務所の人が説明してくれたときには、あるところを通してサッカー協会から話があったと言っていた。

田中：サッカー協会は今年から女子とフットサルの普及を川淵氏も言っている。おそらくタレントを抱えているところに言っていて、モーニング娘を抱えているところが手を挙げた。そういう話ではないかと思う。今までの話を聞いていて時代は変わったと思ったのは、昔、タレントが売り込みをかけたのはジャイアンツの始球式。押しかけているのかギャラが出ているのか知らないけど。これがうさくさいと気づいてきたら、次は日本代表の国歌斉唱。下手なタレントが出てくるとブーイング。それなりの歌唱力もあるし、韓国で日本の国歌を歌うのなら在日の人にやってもらうなど、綿密な計算がサポーターには伝わってくる。「こいつら本気だ」という感覚。ハロプロが大会後、女子サッカー日本代表の応援に、清水ナショナルトレセンまで来た。この子たちはサッカーに目覚めて、女子代表の北朝鮮戦にも応援に行ったのだというところまで話がつながるのであれば、僕らは、この子たちは「本気だ」と判断する。ビジネスであってもなくても問題ではない。

澤井：タレントやタレント事務所は常に新しい話題づくりを探しており、そうした話題づくりの一環だと思う。そうしてメディアに取り上げられて露出するのが目的でしょう。ただそうした芸能事務所側の事情を把握した上で、フットサル普及に利用できるものは利用すればよいと思う。

名方：かつて広告代理店の企画部長をやっていたのでわかるが、これは「仕掛け」です。

### 3. 肖像権をめぐる

名方：中塚先生がよくここまで勇気を持ってやられたなど、敬意をもって聞いていた。今、NPOでコミュニティスクールをやっているが、教育委員会との共同作業に3年かかった。「株式会社」が出たらまずだめ。NPOならちょうど中間だからそこそこいける。何かするときには同意書を出している。ハロプロの同意書にある「東京中央裁判所」というのは、外資系の企業はやるが、普通の契約書はここまでやらない。そういう意味ではしっかりしているなどと思う。僕だったら逆に、学生が純粋に楽しみで撮ったものについては、我々に使わせろぐらいのことを主張して、逆に彼らに同意書を出さ

せるといい。それが、フットサルを純粋にアマチュアでやっている人も使えることにつながる。

中塚：この同意書は、対戦チーム（筑波の子）の肖像権についての話。ハロプロの子の肖像権については言っていない。

名方：会場での撮影についてラグビーは厳しい。見に行っても写すなどと言われる。

宇都宮：ちょうどJの広報の方と話す機会があった。企画としては何もない段階から、アルビレックスの試合の様子をスタンドから撮っている。面白いコンテンツである。スタンドの絵が面白いねという話になって、雑誌の表紙に使わせてほしいとなった。しかし、雑誌の場合、中はいいが、表紙で使用する場合は商業目的とされ、その場合はいくらかの使用料を払わねばならない。専門誌は長年の貢献というところでOKだが、ファッション誌がJの写真やスタンドの光景を使うときは、どういう意図で使うのかを明確にしないと使えない。Jリーグでは基本的にスタンドからの撮影は禁止。ホームが対応できないこととセキュリティの問題（長いレンズを振り回したり）による。

澤井：中に入って撮るのがいけないのか

宇都宮：Jの主張としては、Jの施設が写り込んでいるものは一切Jリーグフォトの管轄になる、スタジアムの外観も。個人の趣味で楽しむ場合はいいが、雑誌に載せる、ましてや表紙に載せるとなると、きちんと通さなければいけない。Jの言っていることはよくわかるが、選手ではなく、周りのものを撮っている人間からすると、日本って一番撮りにくいなあと感じる。外国で言われたことはない

名方：アメリカでは5ドルや10ドル払ってOKをもらって撮るというのを聞いたことがある。例えば高体連がエージェントを作ってお金を取り、その代わり肖像権は守りますよということをするればいいのでは。そういう発想、権利とか契約といった発想が日本の中にある。スポーツする人は純粋で、しかも学校教育が強いこともあるだろう。学校はどちらかということ、反対された先生のような感覚が多いのでは。わかっている人がやればいいのかと思うが、問題があったときに問題が起きる。そういうときには文書で契約を交わす必要がある。

#### 4. 会場の雰囲気について

宇都宮：この大会はサッカー好きが見に来たのか。サッカーファンじゃない人が多かったのではないかな。

中塚：サッカーファンでないハロプロファンが400人いた。しかしその連中も、ハロプロが“フットサルをしているところ”を、食い入るような感じでみていた。そういう意味では芸能空間でなくフットサル空間であった。ハロプロの方がアウェイゲームであったと感じる。ハロプロファンの大半は男性だった。

宇都宮：国立の女子代表も男ばかり。新しいマーケットを開拓したのではないかな。

## 【2】ニッポンハムカップにみる、フットサル登録制度の課題（本多克己）

### 1. ニッポンハムカップとは

本発表の趣旨は「JFAが推進するフットサルチーム登録、個人登録をさらに深く浸透させていくにあたり、民間施設、イベント事業者が主催する大会についても登録を行う形を模索したい」（配付資料より）ということであって、決して協会に対するクレームや批判ではないことを最初にお断りしておきたい。

ニッポンハムカップはサンケイ新聞主催、(株)クラブハウスが企画・運営している大会で、1997年度から毎年、過去7回大会を行っている。1997年度（116チーム）～2001年度（396チーム）までは「セレッソ大阪杯」、2002年度（404チーム）からは「ニッポンハムカップ」となり、2003年度は472チームが参加した。

民間大会ではあるが第1回から「チーム登録」をし、1チームあたり3000円を協会に支払ってい

る。大阪が決勝大会を開催するので、大阪サッカー協会が 2002 年度まで「主管」、2003 年度は「協力」となっている。2004 年からは関東での予選大会もはじまる。これにともない、日本サッカー協会へも後援名義を申請中。東京都サッカー協会からは「協力」として名前をいただいている。

協会の後援が入ると自動的に個人登録も必要となる。JFAでは「本協会または加盟団体が後援する大会においてもフットサル登録を実施することを原則とする」となっている。後援する大会でも登録が原則である。

今回の大会でも「必ず個人登録してください」と話をいただいた。ここでいろいろな問題点が出てきたので報告と、皆さんから意見をいただければと思う。

## 2. 問題点

個人登録についても、「原則として」全員に登録してもうという方針ではあるが、問題点は多い。

- 1) 誰でも気軽に参加できるという、フットサルの本質的な魅力、及び大会の趣旨から外れてしまう
- 2) 登録のチェックをどのように行うか
- 3) 登録できていない参加者にどのように対応するのか
- 4) 例えば、抜き打ち検査を行うことにすれば、確認の手間は軽減できるが、もしそこで未登録者が発覚した場合、他の未登録チームとの不公平感は拭えないのでは？

上記の問題点がクリアできない場合、主催者としては「協会登録を行わない」という選択を検討することになり、協会は協会登録（少なくともチーム登録）を行おうとする事業者を取り込んでいくチャンス、及び得られるべき登録費を失う可能性がある（配付資料より）。

今まではチーム登録分として毎年 100 万円ぐらいずつ協会に払っていた。今後も払っていきたいのだが、上記の問題点をクリアできないと、これまでやっていたチーム登録もできなくなるだろう（「チーム登録だけでもいい」というのはサッカー協会としては難しいだろう）。

## 3. 論点

- 1) 主催者・参加者にとって、登録をする必要はあるのか？  
大会の格、箔付け、及び事故発生時の管理責任以外には不要？
- 2) 登録の目的は何なのか（競技者・競技人口の把握、原資の獲得…）
- 3) 協会主催の大会での「全員が登録」ではなく、民間事業者と協会（及び連盟）が共同で、フットサルの普及・振興に取り組んでいける「登録制度」のあり方は？（配付資料より）

主催者側の思惑としては、協会の公認という、大会の格、箔がある。

去年の大会で乱闘事件があって、警察が入ってきたり、会社に弁護士から内容証明が送られてきたり、大ごとになった。そのときには、協会の審判がジャッジしていたので管理責任は果たしていますということで許していただいたということがあった。これが単なるアルバイトの学生がやっていたというのでは管理責任というところで問題があったのかもしれない。しかしこうした場合以外には、協会登録の必要はないのではないか。

そもそも協会に登録するのは何なのか。本当にそのための登録制度でいいのか。

ではどういう形があるのか。まだ結論は出ていない。そもそも民間でサンケイ新聞が主催してやっているのと、日本代表を強化していくことが矛盾しているという指摘もある。しかしそれを言ってしまうと身も蓋もない。民間でやっていることを協会も支援していくし、協会の活動に民間も協力していくという「いい形」はないのか。

## <ディスカッション2>

### 1. 個人登録の方法について

本多：今回の募集では「必ず登録してください」とは言っていない。協会との調整の途中で募集をかけた。個人登録してくださいという言い方はするが、チェックはできない。

田中：個人登録していない人がいると協会は後援できないのか。

本多：フットサル登録規定をみると「実施することを原則とする」となっている…。

中塚：東京都の第2種大会でも、個人登録をどうチェックするかが話題になった。大会当日はあわただしくてチェックできないので、代表者会議でチェックするようにした。しかしそれはしょせん16チーム程度の話。

本多：参加見込は700チーム。郵送でやり取りするが現実的にチェックは難しい。

澤井：フットサルチャレンジはサッカー協会直営なので全員登録は当然だろう。

田中：抜き打ち検査も、今のままではドーピング検査みたいで公正さを欠くように思う。ところで、個人登録をしていないチームからは参加費を倍額取るような方法はどうか。

澤井：考え方としてはありだろう。協会登録したところは割引する。この大会だけ出たい人にとって、年間通しての協会登録のメリットはない。継続的に協会のサービスを受けたい人が登録するのが筋だろう。

本多：「チーム登録」の段階ではあまり問題にはならなかったが、「個人登録」になるとこのような問題が出てきている。

田中：ゴルフでは、例えば名門浜岡カントリーで「何とか杯」をやるとなると、浜岡カントリーのメンバーは5000円で参加できるがビジターだと3万円ぐらい取られる。競技そのものは同じルールで競いあい、こういう形でオープンな大会にする。個人登録する人はメンバーシップであるという考えに立てば、これぐらい較差を付けてもいいのでは。個人登録は協会のためにもなる。

名方：割り増し分は協会に払うのか主催者に払うのか

本多：チーム登録費は主催者から協会に払う。個人登録は直接個人と協会です。

名方：登録料をどうするかは大会の収支決算に直接影響するので、民間の場合は大きな問題だろう

澤井：こうしたことはそもそも協会が考えることで、民間の側が考えることではない。基本的には協会のサービスを登録者が受けるが、協会のメンバーでない人にもサービスをするのだという姿勢を入れてもらい、その代わりに、登録した場合のメリットがあると思ってもらったら登録するという形がいいのではないか。

宇都宮：ビギナー、エンジョイのカテゴリーには一見さんぼい方が多いのでは。そういう人にも登録が必要になるのか。非常に閉鎖的な感じがして大会自体の趣旨と離れているように思う。

本多：例えばファミリーのカテゴリーで、今日初めてやる小学生の子どもも登録よとなるのはつらい。

田中：レディースは無料になっているが。

本多：女子だけチーム登録していない。これもイレギュラーな話

中塚：似たような話がユースリーグの公認化をめぐるでもあった。DUOリーグ参加者はほとんどが協会登録しているが、特別枠選手など、協会登録していない者も出られた。それを公式戦化するにあたって、登録していない者はだめなのかということが話題になり、TFA主催大会となったらだめということになった。せっかく現場対応で“遊び心”をまぶしながらやっていた良さがなくなってしまふ。登録選手だけが対象で、IDカードのチェックを毎試合やって、持ってきていない者は出られない。これがいいのかなと疑問に思った。別の理由で公認リーグにはならなかったけど、その結果元に戻ってそうした煩雑さがなくなり、ほっとしているところもある。

## 2. 登録の目的—審判派遣の関係で

本多：登録の目的は何か。「後援」をいただかなくても、協会からの審判派遣だけでも主催者としてはありがたい。ただ、審判を派遣するには後援している大会でなければならないというものもある。協会からの審判派遣の枠を広げてもらって、その部分はお金で解決するという方法もあるかと思う。



小幡：ワッペンをつけている以上、協会主催・後援でないと行くことはできない。例えば芸能人の試合の審判をするのは今のところ難しい。ワッペンを外してやるのならいいよと言われるときもあるが、トップレベルの審判はよほどのことがない限り難しいだろう。登録制度の「お金」については、「メンバースhip」ということで、世界に日本を代表する審判員を育成し強化するために、また、審判員を広く普及させるために払ってください。そこまでしか言えていない。歴史が浅いので、難しいところもある。

中塚：審判の登録制度は行き渡っている。登録しないと公認審判にはならないが、他に登録のメリットはあるのか

小幡：メリットは、ビデオやルールブックがもらえるとか。4級ならそう。しかし1級だと、登録料を払うけどステータスしかもらえない。日本協会だけでなく都道府県・関東にも払って登録している。

澤井：審判手当は級によって決まっているのか

小幡：競技会ごとに決まっている。Jならいくら、関東社会人なら、高体連ならと

澤井：けんかがあった時に警察が入って、審判が協会派遣だったからというのが大きかったのか

本多：警察はそう言っていた。アルバイトだったらどうだったのかはわからない。

宇都宮：これだけ多くのチームが参加して、莫大な試合数になる。何人ぐらい審判がつくのか

本多：1日あたり8人。1面に4人つく形で審判をやっている。都道府県の社会人リーグなどになると、主催者側が審判を出すだけでなく、相互審判のところが多い。

小幡：審判は級を持っているのか

本多：この大会は持っていない人も吹いている。謝金は1日1万円台。来てもらっている人については、協会の仕事というよりもバイト感覚で来ている人も多い。

田中：テニスでは「負け審制度」があるが、そういうのはないか

本多：都道府県レベルでフットサルリーグがしっかりしている兵庫県では、150チームぐらいで1~4部までピラミッドができています。1部だけは協会から審判が派遣され、それ以外は相互審判。自分の試合の前後に審判する。それはそれで特に問題はない。ニッポンハムカップでは、お客さんに対するサービスとして主催者が審判を用意しますよということ。気軽に参加してもらおうというねらい

田中：フットサルはセルフジャッジではできないか。医学部レベルのテニス大会はセルフジャッジでやり、公式記録も残る。わからないときにはサブからやり直す。

本多：お遊びレベルならいいだろうが、乱闘になってしまう（笑）

小幡：フットサルの審判は難しい。バスケットのように何秒というように時間があり、11人制と違うルールで、審判なしでは難しいだろう。

加藤：フットサルのこうした大会で難しいと思うのは、クラス分けどおりにはなかなか出てこないこと。“ビギナー荒らし”がいる。そういうところはビギナーであっても勝ちにこだわり、ジャッジに問題があると乱闘に発展する。自分が参加した大会でそういうのが目の前であったが、審判はバッジを付けていたので良かった。

伊藤：社会人リーグのサッカーをやっているが、東京都の社会人リーグは資格を持った人が審判をするが、プライベートリーグだと資格を持たない人がやって、オフサイドも10年ぐらい前の感覚でやったりして全然面白くない。大会を面白くするという意味でも、オーソライズされた審判がするのはいいことだと思う。オフサイド取ってくれないとやる気がなくなる。せっかく休日にわざわざやるのに…。

本多：ニッポンハムカップで協会派遣審判が来て、シャツ入れろ、ストッキング上げろ、レガースしろと言われ、最初は「お客さん、お金もらって来てくれているのにそんな厳しいこと言わんといてよ」と思っていたが、それを7年間継続するとい大会になってくる。この大会はちゃんとした審判がちゃんと厳しいことを言ってくれる大会ということで、ルールの部分をきっちりやっていくのは長い目で見たらいいことだなと感じている。

澤井：オーソライズされてきたのは実は参加者が選抜されてきたということかもしれない。あそこはうるさいからいやだという人が参加しなくなってきたのでは。確かに安心して参加でき、ルーズな者がはけるのはいいことかもしれないが、ルーズな者を教育する機会を失ってしまう。難しいところである。学内の大会をやっている、中国人の留学生チームに対して1級審判が「ソックスを買ってこい」といっても無理。レガースはこちらが用意するが、彼らはソックスが短くて入らない(笑)。彼らなりにスポーツしたいのに、排除してしまっているのか。彼らがいなくて確かに大会はオーソライズされるが、それでいいのか。

中塚：この話題になると必ず本多さんと澤井さんの2つの例が出てきます。本多さんの新幹線の時間が迫っているのでここまでにしましょう。

### 【3】フットサル世界選手権予選報告

梶野氏からの資料をもとに、マカオで行われたフットサル世界選手権のアジア予選を振り返った。新聞での取り上げられ方は小さかったが、初めて予選を勝ち抜いて本大会出場を決めたところに大きな価値がある。

「マカオで開催されていた、AFC FUTSAL CHAMPIONSHIP 2004の結果は別紙のとおりです。

優勝 イラン

準優勝 日本

3位 タイ

(中略)本大会は、2004年11月22日～12月15日までチャイニーズ タイペイで開催されます。FIFA WORLD FUTSAL CHAMPIONSHIP(世界選手権)の予選を兼ねており、本大会上位3チームに出場権が与えられ、日本につきましては、1989年以来の2度目の参加となります。(1989年は招待)」(梶野政志氏より)

伊部：決勝トーナメントから取材した。3回連続決勝の相手はイランで、3回とも破れて準優勝であった。イランと日本がアジアでは抜けている。今大会は過去最高の18ヶ国が参加したが、アジアの国々がフットサルに力を入れはじめていると感じた。日本の監督はブラジル人のサッポさんだったが、タイの監督も、ブラジルのU-23フットサル代表監督をされた人が監督をして3位に入った。今までは国内の指導者がやっていたが、今はフットサル先進国の経験者がアジアにやってきてレベルアップしている。他国の人に聞いたが、11人制のサッカーだと日本・中国・韓国にかなわない。だったら東南アジアのチームはフットサルに力を入れて、フットサルにサッカー好きな国民の目を向かせようということで、マレーシアやインドネシアなどもかなり力を入れていた。日本に関しては、かなり戦術的にも向上した。今までは選手の実感でやっていたところがあったが、フットサルらしい試合をしたと思う。結果的にはイランの個人能力にやられたが。

今回、イラン、日本、タイが世界でも結果を出す可能性があると感じた。

### 【報告作成者(中塚義実)感想】

久しぶりに報告書を作成しました。結構時間を使いますが勉強になります。若手は積極的に報告書作成に立候補しましょう。

フットサルをめぐる様々な話題が盛りだくさんだった。時間が限られていたのが惜しいが、次回以降のテーマになりそうなものもいくつかあった。

日常の活動の中で、様々な立場の方に意見を聞いてみたいテーマが山ほどある。サロン会員は誰でも月例会の発表者になることができる。メーリングリストへの投稿と同じく、月例会もどんどん活用してもらいたい。間違いなく自分自身のためになる。

会費を払って会員になると、サロンの月例会案内が届く。名簿も送付される。サッカー協会の登録制度よりもメリットは明確である。

会員にならなくても月例会には参加費 1000 円を払って参加することができる。継続的にサロンのサービスを受けたい人は会員になればよい。そうでない人は、月例会に単発的に参加することを選べば良い。

会員制のサロン 2002 とそこにおける月例会の位置づけは、そのままサッカー協会の登録制度と各種事業（競技会など）に置き換えることができる。

規模は全く異なるが、基本的な考えは同じで良いはず。サロンもメンバーシップを重視しながら、メンバー以外への働きかけも行っていきたい。